

コリント人への手紙第二 第 11 章 30 節

「もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります。」

誇りと弱さが同居している。それにどうしても誇る必要があるなら、とことわる。どうしても、である。本意では誇ることを強く退けているようである。そのうえで、どうしても誇る必要があるなら、と言う。それが、弱さについてのことである。それも、自分の弱さについてである。弱さを知っている者が、どうして誇る事が出来るだろうか。世の常は、弱さは敗北、敗者、落第者のレッテルを貼られる。しかし、ここでは弱さが誇りとなる。世の常でない真実がある。

ある日、ある場所に出向いた。今年いっぱい群れの集いを終えなければならないところである。午後いっぱいの時間をかけて数人の仲間と群れの行方を模索し、望みを見ようとした。長い会話ではお先真っ暗な道しか見えないありさまであった。あらゆる方面を取り上げては、群れが抱える弱さのリストアップとなる。会話は進むが、八方塞がりのように思われる。弱さの現実をさらけ出し、より頼むお方に行方を尋ね求む。

そこに確かに明らかになるのは神のご臨在、主イエスが伴われ、御霊による励ましのリアリティである。弱さのただ中にありながら、誇れる三位一体の神がおられる。だから弱さを誇る、誇れる。

2024年8月12日